

留萌炭田雨竜地区下キネンベツ川中流地域（エホロカブッ
コロナイ沢付近）地質調査報告

星 野 一 男*

Geology of the Neighborhood of Ehorokabukkoronai-zawa, near the
Mid-stream of Shimokinenbetsu, Uryu District of Rumoi Coal Field

by
Kazuo Hoshino

Abstract

1. The Uryu group in this area is divided into four formations in the stratigraphic order as below.

Coal-bearing shale member	160 m +
Sandstone member	10~40 m
Sandstone, shale member	130 m
<i>Corbicula</i> sandstone member	140 m +

The *Corbicula* sandstone member may be correlated with the Tachibetsu formation, and the others correlated with the Migiohmata formation of the Showa area.

2. It makes folding with the axis of N 30~40°W. Along the Ehorokabukkoronai-zawa, it has an anticline and two synclines. Near the mouth of the Itarakaomappu-zawa a faults-zone is found in E-W direction, and it is followed by many minor faults.

3. The coal-bearing shale member, in its basal part, contains 3 or 5 coal seams, which are 1 or 3 m in thickness.

4. Along the eastern margin in this area, the Neogene system develops over the Uryu group probably with unconformity.

要 旨

1) この地域の雨竜層群は上から次の4層に分けられる。

含炭頁岩層	160 m +
砂岩層	10~40 m
砂岩頁岩層	130 m
蜆貝砂岩層	140 m +

蜆貝砂岩層は昭和地域の太刀別層に、他の3層は右大股層に対比されるものと思われる。

2) 褶曲方向は N 30~40°W で、エホロカブッコロナイ沢に1背斜2向斜が見られる。イタラカオマップ沢付近には E-W の断層帯があり、多くの小断層を伴っている。

3) 含炭頁岩層の下部に厚さ 1~3m の炭層が 3~5

枚挟有されている。

4) 地城東縁には新第三系が分布し、おそらく雨竜層群を不整合に被覆しているものと推察される。

1. 緒 言

1.1 調査目的

この調査は昭和 26 年より始められた本所の留萌炭田調査事業の一環として行なわれたもので、下キネンベツ川中流のイタラカオマップ合流点よりタンウンナイ合流点に至る流域からエホロカブッコロナイ沢流域一帯の層序・構造ならびに炭層の概況を明らかにすることを目的とした。

従来、この地域には雨竜層群といわれる古第三系と川端層に相当するといわれている新第三系が分布していることが知られていた。また、地域東方の昭和地域に発達

* 燃料部

する *Amynodon* を含む高砂沢砂岩層がこの地域においてどのような分布を示すかが問題であった。この調査にあたっては、それゆえ、雨竜層群と、“川端層”との関係、および高砂沢砂岩層相当層のこの地域における層準の2点について、とくに留意した。

1.2 調査員・調査期間

地質調査 星野一男

昭和32年7月15日～9月21日。

地形測量 窪木時雨郎・市川賢一

昭和32年6月17日～7月25日

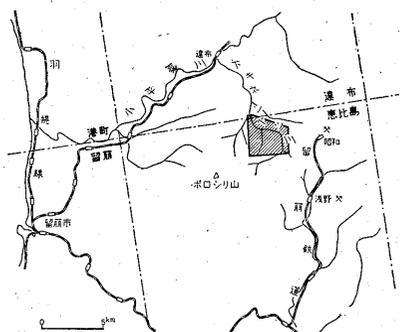
1.3 調査方法

調査には測量課作成の5千分の1実測河川ルート図を使用した。野外調査では地域の全ルートについて間縄とブラントンコンパスによって1千分の1のルートマップを作りながら作業を進めた。この結果を5千分の1の実測図にまとめたものである。なお、全期間を通じてイタラカオマップ沢河口付近に幕営して調査を行なった。本報告のうち、第6図ルート図および第7図柱状図は記載が細事にわたるので、この報告では省略した。

なおこの調査にあたり、現地において多大の便宜を供与された古河鉱業雨竜鉱業所の各位に対して厚く感謝の意を表す。

2. 位置および交通

この地域は小平蘂川の1支流である下キネンベツ川の中流地域にあって、留那郡小平村に属する東西約2km、南北約2.5kmの範囲である。



第1図 位置および交通図

この地域に至るには留那鉄道新雨竜駅より徒歩で北西北に分水峯をこえるもの(所要時間2.5時間)と、天塩鉄道達布駅より下キネンベツ川を徒歩で遡るもの(所要時間3時間)がある。調査時において同地の営林署により達布より新雨竜に至る道路が建設されつつあった。

3. 地形

この地域は下キネンベツ川およびその支流であるイタラカオマップ沢に囲まれており、中央をエホロカブッコロナイ沢が北流している。これらの水系は緩やかで、急傾斜であるエホロカブッコロナイ沢の場合でも河床の傾斜は1/25である。この地域の最高点は海拔325mで、山陵もかなりなだらかで低い。付近の河床は海拔100m前後なので、河床面からの比高は200m程度にすぎない。しかし人跡のまれな地帯なので、樹木はよく繁茂しており、また熊笹が随所に密生している。

侵蝕度は全体を通じて一様である。これはこの地域のほとんどすべての岩石が古第三系の堆積岩のみであるためであろう。岩石の差異による侵蝕差も著しいものは見られない。

4. 層序

調査地域内に分布する地層は古第三系および新第三系からなる。

古第三系はこの地域の大部分にわたって分布し、一般に雨竜層群あるいは小平炭灰層といわれているものに属する一連の地層からなる。この地域に露出するものの層厚はおよそ460mに及び、主として砂岩・頁岩からなり、若干の炭層を挟有している。

新第三系は調査地域の東辺にわずかに露出するのみで、従来川端層に相当するといわれている。古第三系との直接関係は野外で確かめることはできなかった。

4.1 古第三系

この地域の古第三系は岩相からみて4層に分けることができる。この報告に際してはこの4層を便宜的に次のように仮称することにした。

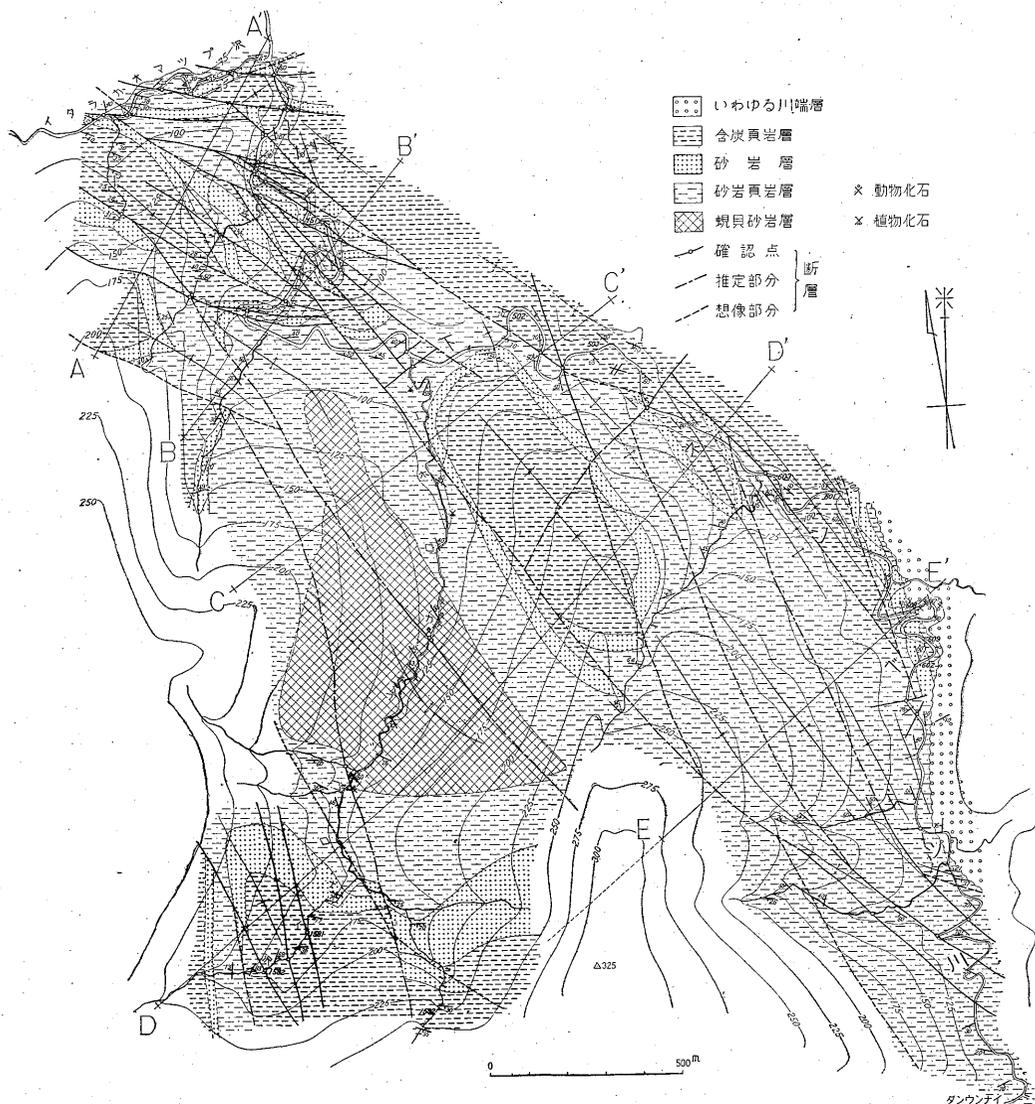
- 含炭頁岩層
- 砂岩層
- 砂岩頁岩層
- 蛭貝砂岩層

これらの各層はいずれも後述するように岩相の側方変化が著しい。蛭貝砂岩層は *Corbicula tokudai*, *Ostrea* sp. などを含む汽水成の顕著な地層からなる。その上位には含炭砂岩頁岩層が続くが、ほぼ中位に比較的厚い砂岩の層があり、鍵層となっている。この砂岩の層を砂岩層として、その上・下をそれぞれ含炭頁岩層・砂岩頁岩層とした。

蛭貝砂岩層は浅野地域における太刀別層の最上位層である柳沢蛭貝砂岩層に対比されると思われる。

4.1.1 蛭貝砂岩層

本層はこの地域のほぼ中央にあるエホロカブッコロナ



第 2 図 下キネンベツ川中流流域（エホロカブツコロナイ沢付近）地質図

イ沢中流付近にドーム状に分布する。

おもに中粒～粗粒砂岩からなり、頁岩および細粒砂岩を挟み、ときに炭質頁岩の薄層を挟むことがある。

中粒～細粒砂岩は一般に帯緑灰色を呈し、粒の円磨度は良好であり、粒度も比較的一定している。粒は長石・石英が多いようである。しばしば泥岩の破片や菱鉄鉱様の薄層（厚さ 2～5 mm）を含むことがあり、このようなところではやや褐色を帯びている。また、ときには有色鉱物質あるいは有機質を混入して黒色を帯びることがある。岩石は比較的硬い。

頁岩・細粒砂岩は黒色泥状であって層理を示さない。本層より次のような貝化石を産する（水野篤行同定）。

Ostrea sp.

Corbicula tokudai (YOKOYAMA)

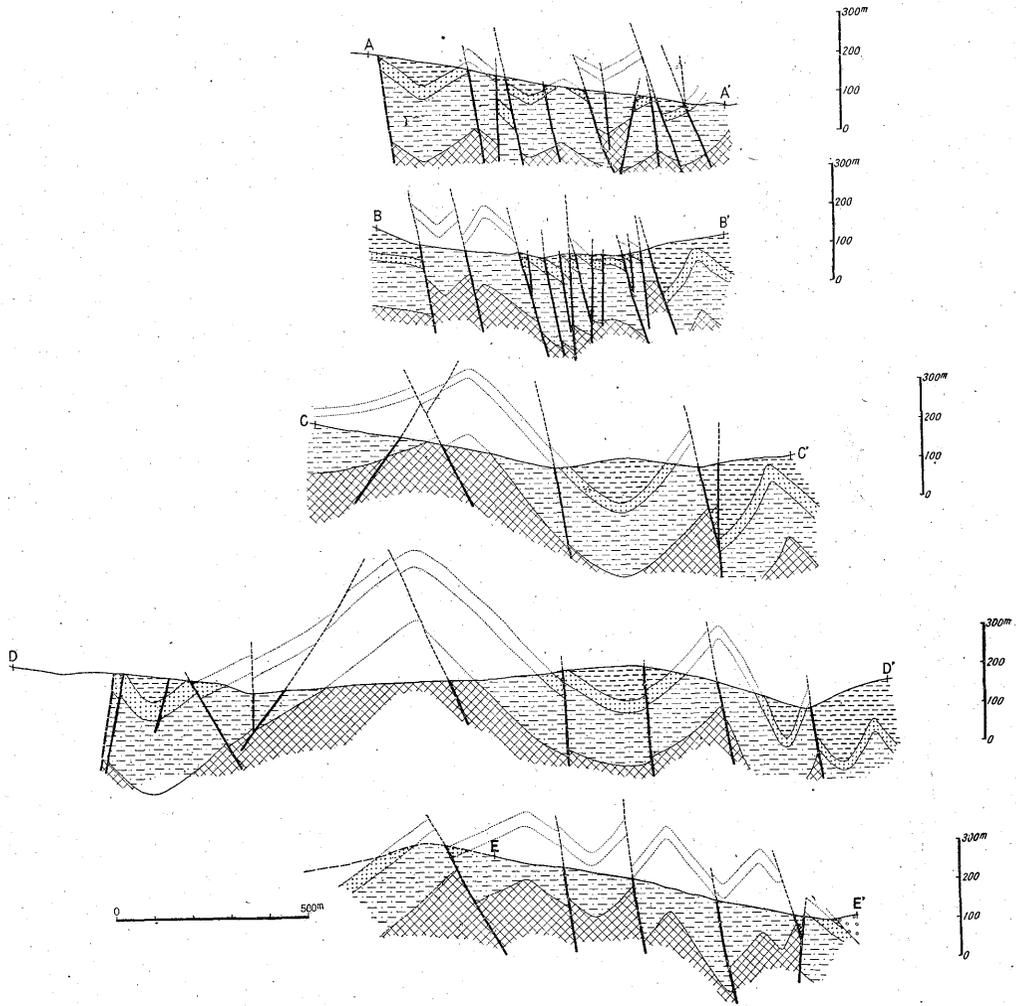
Paphia munroei (YOKOYAMA)

化石はおもに砂岩から産し、*Corbicula* の産出はきわめて顕著である。この地域内において認められる本層の厚さは 140 m 以上である。上限は上位の下部互層に漸移するが、下限は不明である。

本層は灰白色を呈する比較的硬い中粒砂岩の卓越することや、ほとんど全層準から *Corbicula* sp. を多産することによって、きわめて特徴のある地層となっている。

4.1.2 砂岩頁岩層

本層はこの地域内でもっとも広く分布する地層である。標式的露頭はエホロカブツコロナイ沢合流点付近において観察することができる。



第8図 下キネンベツ川中流流域(エホロカブツコロナイ沢付近)地質断面図

本層は頁岩・砂岩の互層からなり、若干の炭層を挟有する。頁岩は黒色緻密で、葉理面がよく発達している。砂岩は灰色を呈する粒度のほぼ一定した中粒砂岩で、ときに褐色を帯び、蜆貝砂岩層の砂岩とよく似ている。灰色・硬質の細粒砂岩もよくみられる。

また、数枚の炭層あるいは炭質頁岩を挟有するが、いずれも薄く、消長も激しいのでおそらくレンズ状に挟有されているものと思われる。

本層より植物化石および珪化木を産する。植物化石は保存不良で同定できないものが多いが、次のようなものが認められた(尾上亨同定)。

Cercidiphyllum sp.

Carylus sp.

本層の厚さは130mである。

4.1.3 砂岩層

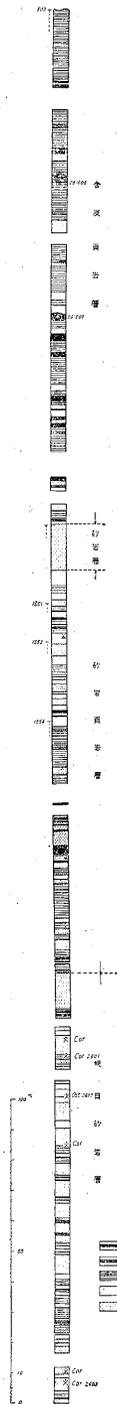
本層は前述の砂岩頁岩層と後述の含炭頁岩層との間に

あって、ほとんど砂岩のみからなる地層である。

おもに塊状・無層理の帯微緑灰色の粗粒砂岩であるが、しばしば細粒砂岩・頁岩・炭層を挟むことがあり、これらは互いに移化している。第8図に本層の岩相変化の一例を示した。

同図は1千分の1のルート・マップから作成したもので、第6図(省略)あるいは地質図において柱状番号608, 609, 602, で示される区域にあたる。Aにおいては塊状・無層理の厚い砂岩層からなるが、Bでは細粒砂岩が多くなり、頁岩層・炭層を挟有する。Cではふたたび砂岩が優越してくる。

本層はこのように粗粒砂岩層の消長が激しいので、野外の露頭やルートマップ、柱状図などで、地層の境界を定めることが困難な場合がある。そのために地質柱状図では砂岩層の厚さや位置を考慮して多少便宜的にきめた所がある。



第4図 エホロカブツコロナイ沢下流総合柱状図

本層の主体をなす砂岩層の厚さは 10~40m である。

4.1.4 含炭頁岩層

本層はエホロカブツコロナイ沢上流および下キネンベツ川流域などに分布する。

系	地層名	層厚	柱状図	岩相	化石その他	5500地層との対比
新第三系	川端層?			礫岩・泥岩		
古第三系	含炭頁岩層			頁岩		右大股層
	砂岩層	160+		下部に3-5枚の炭層 粗粒灰色砂岩	珪化木	
	砂岩頁岩層	40		頁岩・砂岩 濃い炭層	<i>Cercidiphyllum</i> sp. <i>Corylus</i> sp. 珪化木	
	規貝砂岩層	130		帯緑・灰色 中粗砂岩	<i>Corbicula tokudai</i> <i>Ustrea</i> sp.	太刀別層
		140+				

第5図 模式柱状図

おもに頁岩からなり、砂岩層・炭層を挟む。

頁岩は砂岩頁岩層の頁岩と同様の外観を呈し、黒色緻密であって葉理面が顕著である。細粒砂岩・中粒砂岩も砂岩層からの漸移であって、中部砂岩層のものによく似ている。

本層には比較的多くの炭層が挟有されるが、とくにその下部に多く認められ、エホロカブツコロナイ沢上流や、エホロカブツコロナイ沢の沢口とイトラカオマップ沢の沢口との間の各所にその露頭が見られる。

イトラカオマップ沢の沢口付近では、本層の最下部厚さ 40m のうちに 3~4 層の炭層が認められるが、多くの断層のために寸断されており、炭層も乱れているので各炭層を対比することは難しい。擾乱の大きなところをみると炭層の部分が最も大きなもめ方をしている。

エホロカブツコロナイ沢上流の含炭頁岩層は下部の約 50m が観察される。このうちに、6 層の炭層が含まれている。すなわち柱状 No. 1592 において註1)、厚さ 1m 以上の炭層は 4 層を算える。これらのうち最も厚いものは 3m である。その他 1m 以下の炭層は 2 層が算えられる。そこより 100m 西の No. 1581, No. 1582 の区域では、1m 程度の炭層が 3 層認められる。

註1) 以下は第6図、第7図が省略されているので読み難いかも知れない。No. ……は第6図における柱状番号であって、第7図にはこれらの露頭における柱状図が示されている。本文中の露頭の位置は地質図を参照されたい。

No. 502, No. 503, No. 601, No. 603, を含む含炭頁岩層は、下キネンベツ川中流にブロック状に分布する。この部分の地層は頁岩が多いこと、比較的多くの炭層が見られることの岩相的特徴から含炭頁岩層に属するものと思われる。No. 503, No. 601 の下部の数枚の炭層が上に述べたイトラカオマップ沢付近、およびエホロカブツコロナイ沢上流に見られる中部砂岩層の上部にくる数枚の炭層に対比されると思われる。

以上を総合してみると、含炭頁岩層の炭層は、下部約70m のうちに3~5枚の炭層(厚さは1~3m)があり、その上位100m においてはその挟有度を減じ、また厚さも1m 以下のものが多い。

本層も岩相の側方変化が激しく、炭層もレンズ状に尖滅する模様が見られる。第9図に、一例としてNo. 503 が含まれる地域を示す。C 91607 と記されている炭層が河床に露出しており、A では厚さ約6m あるが、河床面でその露頭を追跡すると図のようにB で消失し、代って上位C の炭層(柱状図No. 503 においては17m 上位)が発達するような傾向になる。

なお、たゞ1つの例であるが、本層の下部に凝灰岩の薄層を挟有する所がある(第7図(省略)No. 151(地質図参照))。

本層の上限は断層できられているため、地域内において認められる厚さは約160m である。

4.2 新第三系

この地域では礫岩・泥岩からなる。川端層に相当するといわれている。

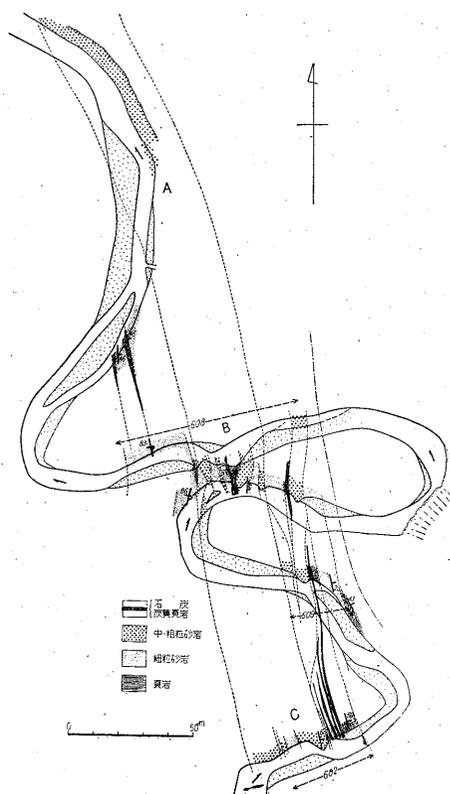
礫岩は暗緑あるいは暗赤色で非常にきたない感じがする。所によって粗粒砂岩を挟むことがある。礫は円磨度不良で角礫状を呈し粒度は中粒程度のものが多いが一定しない。

泥岩は暗灰色を呈し、やわらかい。これもきたない感じのする地層で、雨竜層群の細粒堆積岩とは容易に区別される。

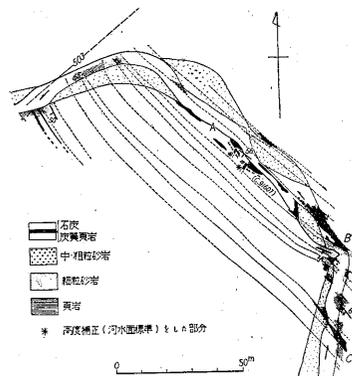
新第三系と古第三系との境界については、第6図に見るように、下キネンベツの流域に4カ所にわたって両者が近接するところがある。これらの箇所では剝土を実施して両者の関係を究明することにつとめたが、いずれの場合も表土が厚くなり、その目的を達成することができなかった。この付近にはN-S 性の断層が多いので、部分的に断層関係の所があるかもしれないが、隣接地域の資料からみて、おそらく両者は不整合関係にあるものと推定される。

5. 地質構造

新第三系については、この地域では東縁にわずかに露



第8図 岩相変化図 その1
下キネンベツ川中流流域における砂岩層の岩相変化を示す。



第9図 岩相変化図 その2
含炭頁岩層中の岩相変化、とくに炭層の消長状態を示す。岩質は第8図と同じ。

出しているのみでルート調査も充分でないで本章では触れない。古第三系の地質構造に関して以下に述べる。

この地域は構造上下キネンベツ川とエホロカブツコロナイ沢との合流点より以南と以北の2区域に分けられる。南部はN 30~40°W の主方向をもつ褶曲構造をなしており、大きく見て1背斜2向斜構造を形成している。断層もほぼこの方向に平行しており、落差は最も大きい

もので 200 m 前後である。

北部は多数の断層によって寸断された1つの擾乱帯である。こゝは、はじめに南部の構造と連続して1つの大きな向斜を形成していたものが N 60°~80°W の方向をもつ断層群によって寸断されたものと思われる。地層は断層のためにブロック化して副次的な小褶曲を伴っているが、大きく見て上記の褶曲方向は N 50°W に変化している。それぞれの断層の落差は小さいが、全体として南部から延びてくる N 30°~40°W 方向の断層をきっている。また、この地域の構造は西から東に、下キネンベツ川流域に近づくにつれて激しくなる。

褶曲はエホロブツコロナイ沢中流の背斜付近では比較的緩やかであって、波長も振幅も大きい。しかしこれが東に移るにしたがって小さな背斜・向斜を繰り返すようになり、地層も直立に近くなり、ある部分では逆転を示す所もある。さらにその東下キネンベツ川にほぼ平行して比較的大きな断層（第 10 図における I₁-I₂-I₃）が約

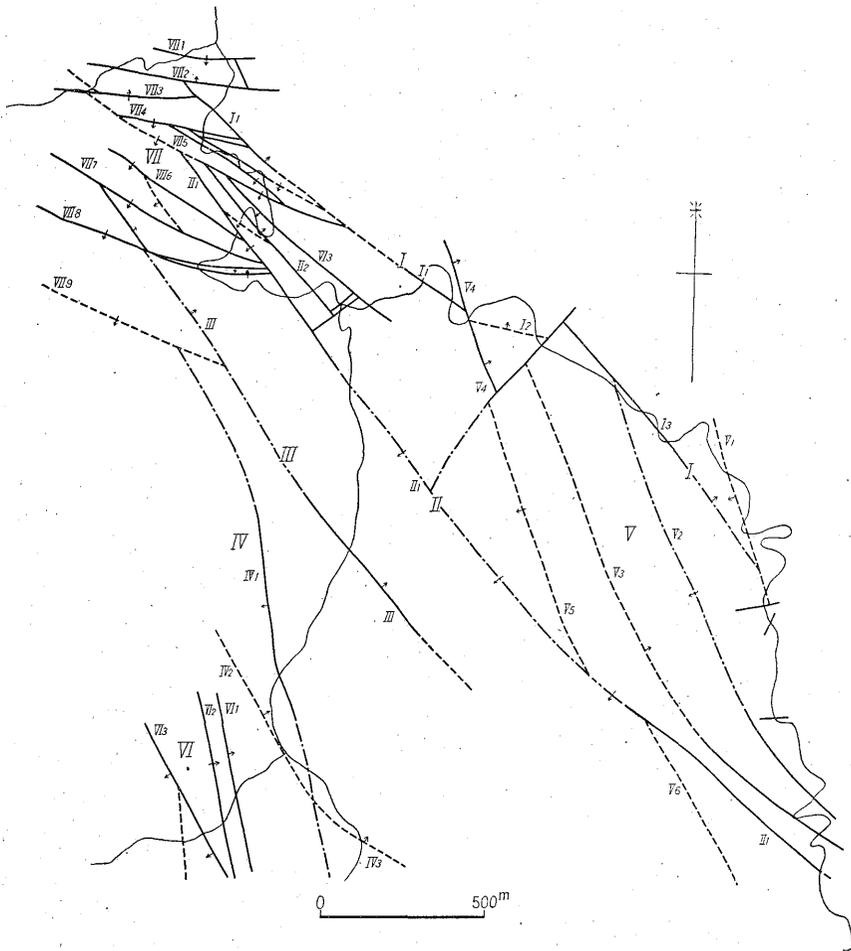
55°W の走向で延びており、落差も 150~200 m あって、この地域の断層のうちでは最大の落差を示している。これらのことから、本地域の東縁にはこの I-断層に平行して N 50°W から 60°W へと延びる1つの擾乱帯があるのではないと思われる。

この地域の構造形成時期を考えると、NW-SE の褶曲と断層の方向とはよく一致していて、おそらく雨竜層群堆積後のある時期にたがいに密接な関連をもちながら発達したものと思われる。

5.1 断層

第 10 図はこの地域の断層を概念的に示したものである。主要断層はほぼ NW-SE 方向のものであろう。すなわち、I, II, III の系統が主要方向を代表するものと思われ（第 12 図 B の α）、V は副断層の方向である（同図の β）。

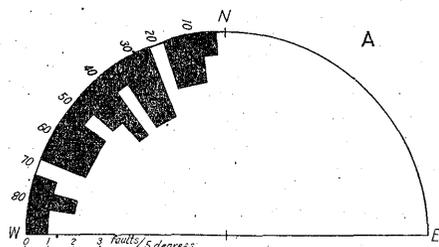
第 11 図は概念図に示した断層のうち NE-SW 方向の若干の断層を除いて、主要なすべての断層の走向を 5°



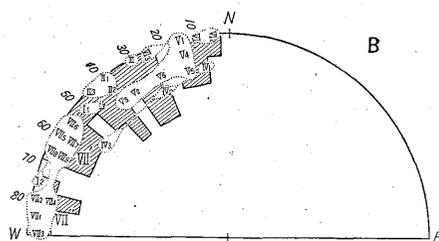
第 10 図 断層概念図

ずつの区分に分けて方向頻度分布をあらわしたものである。第11図Aを見ると、これらの断層走向はNよりWの間にだいたい均等に分布している。しかしこれにBのように断層のグルーピングを行なうとかなり明瞭な傾向がでてくる。VIIで表わされる断層はN50~90°Wの間に入り、残りの断層と区別される。第12図Bはこれらの断層面をシュミット・ネットに投影したものである。断層面は面に直角な直線の極で表わされる。この方法によると、断層面は走向・傾向の2要素によって図上にプロットされるから、断層面が立体的に表わされる。また図上のある面積はそれに相当する球面の面積を等しく表わすから、断層の密度は図上に正しく表わされる。この図ではさきの第11図Bによる傾向がさらにはっきりしてくる。まずVIIの断層はさらに2つのグループに分けられる。VII'はVII₅, VII₆, VII₇, VII₈を含むもので、平均して走向はN60°W, 傾斜80°Nである。VII''はVII₁, VII₂, VII₄を含むもので、平均して走向N85°W, 傾斜65°Nである。VII₃は南側落ちの断層であるため同図Bでは孤立しているが、VII''のグループに入るものであろう。エホロカブッコロナイ・イタラカオマップ合流点付近を通過して東西に延びる断層帯が想像され、VII''はおそらくこの断層帯を代表するものであろう。VII'は南部のNW-SE方向の主断層群がVII'で表わされるE-W断層群で切られたために生じた副断層群であろう。この地域北部の擾乱帯はこのようにしてできたものと思われる。

次に南部の諸断層であるが、第11図BではI₂を



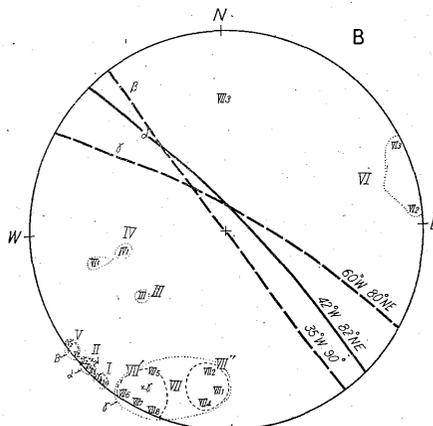
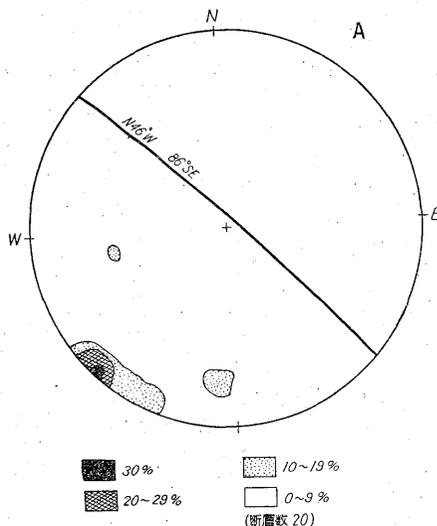
断層の走向を5°ずつの区分に分けて各区分にはいる断層数を柱の長さで比較したもの



Aに断層のグルーピングを行なったもの

第11図 断層の走向の頻度分布

のぞいてN0~50°Wの間に入る。主要断層であるI, II, IIIの断層は平均すると走向N42°W, 傾斜82°NEの面として表わされる(第11図Bのα)。そしてこれの副断層と思われるVおよびVII'の平均断層面をとってみると、同図のβ, γとして表わされている走向N35°W, 傾斜90°, 走向N60°W, 傾斜80°Nの面となる。IV, VIの断層群は走向から考えてαの副断層と思われるが、隣接区域の資料とあわせて検討しなければならない。



第12図 断層の頻度分布図(シュミット・ネット投影)

5.2. 褶曲

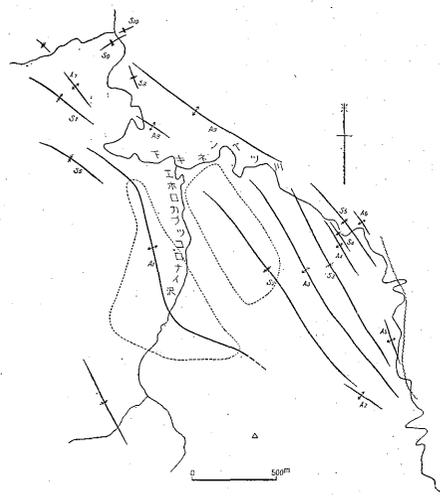
この地域にみられる褶曲軸を第13図にあらわした。下ギネベツ川中流付近の1背斜とその東の1向斜はもっとも大きく、かつ明瞭で、地層の傾斜は30~40°, 波長約1,000m, 振幅250mである(A₁およびS₂)。A₁は褶曲軸が逆S字状に曲折しており、背斜軸は北と南

第1表 断層一覧表（第10図 断層概念図参照）

断層	種類	存在の確実度	走向	傾斜	最大垂直落差 (m)	備考
I ₁	正断層	ほぼ確定	50°W	ほとんど垂直	170±	傾斜は場所により、東西にふれる *中央部ではやや東落ちと推定される。南部では西落ちとなる。
I ₂		推定	75°W	?	150	
I ₃	垂直断層	ほぼ確定	45°W	垂直	100~120	
II ₁	逆断層	〃	35~50°W	ほとんど垂直*	40	
II ₂	垂直断層	確定	40°W	垂直	0~10	
II ₃	〃	〃	45°W	〃	0~10	
III	正断層	〃	35°W	55°NE	30	
IV ₁	〃	〃	10°W	45°W	10	
IV ₂		推定	25°W	?	20	
IV ₃		〃	55°W	?	30	
V ₁		〃	15°W	?	120	
V ₂	垂直断層	ほぼ確定	20~50°W	垂直	50	
V ₃	〃	推定	25~55°W	〃	150	
V ₄	正断層	確定	15°W	40~80°E	50	
V ₅		推定	15°W	?	10	
V ₆		〃	25°W	?	?	
VI ₁	正断層	確定	10°W	60°E	20	
VI ₂	逆断層	〃	5°W	85°W	0~10	
VI ₃	正断層	〃	25°W	84°W	10	
VII ₁	逆断層	〃	85°W	70°N	10±	
VII ₂	正断層	〃	80°W	50~70°N	50±	
VII ₃	逆断層	〃	90°W	40~70°S	120±	
VII ₄	〃	〃	80°W	75°N	0~10	
VII ₅	〃	ほぼ確定	60°W	70°N	70±	
VII ₆	〃	確定	55°W	80~90°N	0~10	
VII ₇	〃	〃	60°W	〃	40	
VII ₈	〃	〃	65°W	〃	30	
VII ₉	〃	推定	65°W	?	100	

に沈降して、ドーム状をなしている。S₂はN 40°Wのほぼ一定した向斜軸をもっているが、南に行くと50°Wに走向を変え、褶曲は小さくなってA₂の小背斜に変わって行く。S₂は中部では不明瞭になって、その北部に1つの盆地をつくっている。S₁はA₁に続く大きな向斜であり、波長もA₁、S₂と同じ程度と思われる。これらの一連の褶曲はA₃、S₃、A₄、S₄、S₅と東に行くにつれて波長300m、振幅200mと褶曲の波長は小さくなるが、それに比較して振幅が大きくなり、地層の傾斜が大きくなって来る。

北部は断層擾乱帯であるために原褶曲構造は破壊されているが、おそらくN 50°W方向に延びる1つの向斜部であったと思われる。現在は断層に伴う派生褶曲が多くなっている。このように褶曲構造は断層構造とよく対応している。



第13図 褶曲概念図

第2表 石炭分析表

No.	採取場所	水分 (%)	灰分 (%)	揮発分 (%)	固定炭素 (%)	発熱量	全硫黄 (%)	補正純炭に対する		炭色	粘結性	
								固定炭素	発熱量			
エ ホ ロ カ 上 流	下記念別川中流	KH 91103	7.28	49.36	21.75	21.61	2,823	0.09	54.83	7,163	淡赤(褐)	非粘結 F ₁
		91102	10.69	35.83	27.47	26.01	3,402	0.38	51.39	6,722	“(”)	“(” F ₂
	含炭頁岩層	91101	11.12	24.51	29.47	34.90	4,410	0.38	55.32	7,066	橙(赤)	“(” F ₁
		91001	10.07	15.98	34.09	39.86	5,207	0.54	54.85	7,303	鮮橙(”)	“(” E ₂
下 キ ネ ン ベ ツ 本 流	含炭頁岩層	KH 91608	6.77	24.32	31.78	37.13	5,160	0.25	55.45	7,706	橙(”)	“(” E ₂
		91607	5.75	53.02	21.42	19.81	2,863	0.13	53.56	7,740	“(”)	“(” E ₂
		91606	11.36	7.81	33.29	47.54	5,700	0.32	59.27	7,106	鮮茶(褐)	“(” F ₁
		91609	9.14	16.12	34.17	40.57	5,446	0.30	55.23	7,415	灰白(”)	“(” E ₂
		91610	6.92	30.97	31.30	30.81	4,523	1.33	51.67	7,585	淡赤(”)	“(” E ₂

6. 石 炭

炭層は砂岩頁岩層・含炭頁岩層のうちにそれぞれ全層準にわたって見られるが、おもなものは含炭頁岩層の下部約 70m のうちに含まれる 3~5 枚の炭層で、おのこの厚さは 1~3m である。エホロカブツコロナイ沢上流および下キネンベツ川流域に分布しているが、断層が多いために各炭層の対比は困難である。これ以外の層準のものは厚さも 1m 以下で消長がはなはだしい。

分析結果は第2表のとおりで発熱量は 7,000~7,750 kcal/kg であり、垂漚青炭あるいは褐炭に属する。しかし、これらの試料は露頭炭より直接採取したものであるので風化あるいは酸化されている可能性があり新鮮な試料に対する発熱量よりも低い値が示されているかも知れない。

7. 対 比

蜆貝砂岩層は、ほとんど全層準から *Corbicula tokudai* (YOKOYAMA) を産すること、灰緑色砂岩の卓越することなどの特徴から、昭和一浅野地域の太刀別層最上部の柳沢蜆貝砂岩層に対比され、したがって蜆貝砂岩層の上部に重なる砂岩頁岩層・砂岩層・含炭頁岩層は右大股層に対応するものと思われる。これら3層は、全体として砂岩・頁岩の互層であること、しばしば 20m 前後の砂岩層を含むこと、含炭層であることなどの特徴は右大股層のそれとよく一致し、少なくとも前2者は右大股層の下部に対比されると考えられる。しかし含炭頁岩層はその上部が下キネンベツ川流域や本地域の北東隅で観察されるが、断層で切られてブロック状になっているので、その層準はなお隣接地域の資料とあわせて検討す

必要がある。

住吉南部と比較すると、蜆貝砂岩層は唐の沢層群の C に当り、D 層はほぼ砂岩頁岩層に当るものと思われる^{註2)}。

次に *Amynodon* を産出した高砂沢砂岩層との関係については、砂岩層が岩相から見て同層に似ている。しかし雨竜一浅野地域¹⁾では高砂沢砂岩層が柳沢蜆貝砂岩層の約 800m 上位にあるのに対して、この地域の蜆貝砂岩層と砂岩層との間隔は 130m にすぎない。したがって砂岩層が高砂沢砂岩層に相当させることはかなり困難である。

他方、高砂沢砂岩層は厚さ 100m で、その上位には福岡沢含炭泥岩砂岩互層があり、下位には基地の沢含炭砂岩泥岩互層があって、上下の岩相遷移の様相が砂岩層のそれとよく似ている。この地域の縁辺地帯には砂岩層を含む地層が断層のためにブロック化しているが、そのうちに砂岩層よりさらに上位の地層が誤って砂岩層に対比されていることもありうる。それゆえこの問題はなお北部および東部隣接地域の資料とあわせて検討を必要とする。(昭和 32 年 7 月~9 月調査)

文 献

- 1) 曾我部正敏・藤井宏惇：留萌炭田雨竜地区南部地域の地質構造，日本鉱業会誌，Vol. 75，No. 855，p. 836~840，1959

註2) 織田精徳・佐川 昭：留萌炭田雨竜地区住吉南部地形および地質図，1952 年調査。未公表